



中段左から4人目 筆者

700円という寮費の安価  
以外に魅力を感じなかつた。例えば、壁が薄く、隣の部屋  
のいびきさえ聞こえるという話、「年功序列」制度が厳しく、「先輩が、カラスが白いといえは白い」という言葉が昔から言い伝えられているという話、秋の啓明寮祭ではふんどしになって町を歩かなければならない話。この話を聞いた時は、自分が啓明寮に入寮するとは思  
いもしなかった：

そんなとき、啓明寮生の部屋に遊びに行くことになった。寮に遊びにいつて驚いたのは、寮生同士の関係だ。廊下ですれ違えば、みんな挨拶をする。一緒に食事をしていく寮生、仲良くお風呂に入っている寮生もいる。大きな黒板には色々な情報が記載されており、コミュニケーションの場になっ

ている。その黒板の前には、大量のミカン。黒板には「食べてください」の文字。実家が農家の寮生の方が、お土産に持ってきてくれたらしい。寮生にとっては当たり前のことだが、私にはすべて新鮮だった。隣に誰が住んでいるかわからないアパート生活

など、近隣とのコミュニケーション不足が当たり前となってきた現代で、この寮はなんて人と人との交流が活発な場所なのだろう。現代には足りないものが、ここにはある。私はその後、頻繁に寮に通うようになり、ついには寮生になることを決意した。

最初は抵抗があった啓明寮祭のふんどしだったが、いつのまにか、啓明寮祭に参加するために、卒業した後も鶴岡に遊びに行くほどになっていた。卒業して8年が経過した今でも、啓明寮生の結婚式では、余興としてふんどしを履き、法被を着用して祝福している。

啓明寮が老朽化し、建て直しを行ったそうだが、あの時の思い出は忘れないし、啓明寮生同士の交流も続いていくだろう。新しくなった啓明寮で、若い啓明寮生が、あの時の私たちと同じように、寮生活のすばらしさを感じてもらえたら幸いに思う。啓明寮に入寮して本当に良かった。